

Den, der lever stille 『静かに生きる人』 作品研究
— 「ケアの倫理」から読み解くオートフィクション—

デンマーク語専攻 永瀬さくら

目次

1. はじめに
2. 研究の背景—オートフィクションの流行
3. 作家・作品紹介
 - 3.1. リオノーラ・クリスティーナ・スコウ
 - 3.2. あらすじ
4. 作品分析
 - 4.1. スコウにとってのオートフィクション
 - 4.1.1. フィクションか，ノンフィクションか
 - 4.1.2. 個人的か，社会的か
 - 4.2. 「静かに生きた」母の声
5. 考察—「ケアの倫理」に着目して
 - 5.1. 自分自身の再創造
 - 5.2. 娘を愛さない母
 - 5.3. 社会への問題提起
6. おわりに

使用テキスト

参考文献

インターネット上の資料

資料

記事の翻訳

要旨

リオノーラ・クリスティーナ・スコウ(Leonora Christina Skov, 1976-)はデンマーク人女性作家である。2017年に母親との複雑な関係をテーマにしたオートフィクション *Den, der lever stille* 『静かに生きる人』を出版し、一躍人気作家となった。出版前から話題を集めたこの作品は、現在では2万部を超えるベストセラーとなり、多くの賞を受賞している。

本稿では、スコウにとってのオートフィクション『静かに生きる人』の作品研究を行った。スコウは本文中において、この作品の目的は「自分自身の再創造」であると記した。一般的に、オートフィクションは自己探究を試みる個人的な物語とみなされている。しかしスコウのオートフィクションは、単に自己について語るだけのものではなく、他者、とりわけ亡き母へのまなざしに満ちた物語である。それでは、スコウは自己のアイデンティティを確立し直すために、なぜ母について語ったのであろうか。

一方、この作品を通してスコウは、「娘を愛さない母」というタブーに挑んでいる。しかし、自分を愛さない母に復讐しようとしたのではなく、むしろ母の声にならなかった苦しみに耳を傾けようとした。スコウが描き出した母の苦悩や葛藤とは、どのようなものであろうか。そもそも、母はなぜ「静かに」生きなければならなかったのであろうか。本稿では以上の点を検討するとともに、母の声を掬い上げることで、社会のどのような問題が照らし出されているのかを検証していく。

本稿の構成は、以下のとおりである。まず2章では、本研究の背景となったオートフィクションの流行について概説した。3章では、スコウの略歴と作品のあらすじを紹介した。テキストを中心に、スコウのインタビューも参考にしつつ、4章では作品分析を行った。ここではまず、オートフィクションに焦点を当てた。先行研究が示す「フィクションか、ノンフィクションか」および「個人的か、社会的か」という観点から、スコウがオートフィクションをどのように捉えているのかを分析した。次に、スコウがどのように自身の母を描き出したのか、具体的に分析した。4章における分析を通して浮かび上がる問いに対して、5章では「ケアの倫理」と、そこから発展したフェミニズム理論を援用しつつ考察を加え、最後にこの作品の社会的意義に触れた。また、本稿において引用・参考にした記事については、資料にて全文の翻訳を載せた。

以上の分析および考察を通し、スコウのオートフィクションに対して以下のように結論づけることができた。まず、スコウのオートフィクションも、一般的なオートフィクションと同様に自己探究のためのものである。しかし、彼女は自分だけでなく、母についても語った。この点について、アメリカの倫理学者・発達心理学者キャロル・ギリガンの提唱した「ケアの倫理」をふまえたうえで、スコウは他者からの分離を通じた自己ではなく、他者とのつながりを通じた自己を見つけ出し、「自分自身の再創造」を果たしたと考察した。

また、スコウは相反する感情の間で苦しむ母の姿を描き出した。スコウの母は、母でも娘でもない、ただ「わたし」として生きることを望みつつも、母娘のつながりや愛を完全に否定することはできなかったのである。母がその葛藤を口に出すことなく「静かに」生きた背景には、母性愛神話があり、現在でもデンマーク社会に根深く残っていることが、テキストから明らかになった。さらにフェミニズム理論を援用することで、たとえスコウのように声を上げたとしても、女性が抱く苦しみや葛藤が、私的なものとして社会から葬り去られている現状についても指摘した。

他方で、オートフィクションは非常に個人的な物語だとされる。たしかにこの作品も、デンマークという小さな国に生きるある一人の女性の個人的な物語に違いない。しかし、スコウは母の声にならなかった叫びを擲き上げることで、デンマーク社会の問題点を示唆した。したがって、スコウのオートフィクションは社会的な意義を持った物語であると言える。

本稿の理論的基盤としたフェミニズム理論を構築した岡野八代は、自律的主体が隠蔽してきた「ひとは傷つき依存して生きる」という事実を明らかにした。そのうえで、この依存する存在こそが政治学の基礎単位であると論じている。スコウの物語のように、個人的だから、ましてや母娘という家庭内の問題だからと言って社会から捨象するのではなく、むしろそのひとつひとつの「物語」から社会を考えていく必要があるのではないか。

本稿では、スコウが照射したデンマーク社会の問題点を挙げるだけにとどまり、問題の原因や背景についての具体的な研究まで進めることはできなかった。デンマーク社会や制度について、文学だけでなく政治学や社会学の側面からの研究もまた必要である。この点については、筆者の今後の課題として設定し、探求していくこととする。